



講演会の最後に、「あなたは、エボラへ立ち向かおうとしたときの恐怖を、どのように克服したのか」との質問に対し、「もともと、自分はスキーも満足にできないくらい、危険なことは苦手です」と言って、しばらく考えた後、「・・・」本当にやるかやらないかは、あの時も、やはり悩んだけれど、最後の最後に自分を後押ししたのは、自分がなぜ医師になったのかということを思い返したからかもしれない。医師としてひとを助けたい。その気持ちが勇気をくれた」とおっしゃったのが、とても印象に残っている。

2012年11月に初めてピオット先生が長崎を訪問して以来、先生の並外れたリーダーシップに、私たちは、いつの間にか引き込まれながら、長崎大学とロンドン大学 LSHTM とのパートナーシップ(下記)は、ここまで成長してきた。今は、その最終形とも言える長崎大学とジョイント PhD デイグリーに取り組んでいる。この JD の話を 2 年前に持ち掛けられたときは、正直、信じられなかった。私だけではない、ピオット先生の側近や、ほとんどの LSHTM 教授も、その話をもちかけたとき驚いた顔をした。「どうして長崎大学と・・・？」よく考えてみると、JD を実現させることのメリットは双方にある。その意義に疑問符を投げかける人たちの間にひとつひとつ答え、その実現に向けて、努力している。



ピオット教授・エドモンド教授を囲んで、TMGH 学生らとの懇親会 5月25日

ロンドン大学衛生熱帯医学大学院(LSHTM)との戦略的パートナーシップ

これまでの経緯:

- 2012年11月 ピオット先生長崎初訪問
- 2013年4月 学術交流協定 MOU 調印
- 2014年1月 LSHTM 部局長会議(SLT)にて承認
- 2014年3月 マーケットプレイスにて LSHTM 学内に周知
- 2014年10月 LSHTM から長崎へ教授2名が派遣
- 2015年7月 LSHTM 方式の疫学・統計学講義が開講
- 2015年10月 TMGH 研究科新設、MTM, MPH, MSc の修士課程が開講
- 2016年9月 グローバルヘルスに関する日英卓上会議開催
- 2017年3月 博士後期課程、国際連携グローバルヘルス専攻設置計画書提出

● 1月のメッセージ

長崎の離島で世界最先端のインフルエンザワクチン研究

人口約2.2万人の上五島の医療を担う上五島病院とのお付き合いは、7年前にさかのぼる。予期せぬことが重なって複数の内科医が急に減る事態となり、対応に困られた八坂院長が、地域医療講座の前田教授と一緒に私の部屋を訪ねて来られたのが最初だ。熱研内科の教授として、私にできることは、上五島病院の状況を教室員に伝え、ボランティアを募ることだけであった。すぐさま総合内科ができる4名の中堅医師が手を挙げてくれ、3か月でローテートをする診療支援が開始された。それ以降、離島という最先端の地域医療現場で総合内科研修を希望

する若手医師が次々と現れ、これを機会に上五島病院は熱研内科にやってくる若手医師にとって人気の研修先となった。八坂院長をはじめ上五島病院内科・小児科の先生方には、医師の育成面で本当にお世話になっている。

実は、上五島という離島は、上五島病院の先生方が、厳しい環境下で真摯に診療を継続されているがゆえに、世界でも例を見ない最先端の研究ができる臨床疫学フィールドでもある。私たちも、この病院で集積されたデータを解析する機会を頂き、その結果が最近 Vaccine というワクチン分野で世界のトップジャーナルに発表された。これは、最初に上五島病院で診療支援を行ったチームのひとりだった齊藤医師が、小児科の小森先生が長年コツコツと集めて来られたインフルエンザの臨床情報の存在を知り、それを新たな統計手法を使って解析させていただいた結果生まれた研究だ。前年のインフルエンザ感染や、前年のインフルエンザワクチン接種が、その年のインフルエンザワクチンの効果にどのような影響を与えているかを明らかにする新たな発見につながった。この研究成果をどのように解釈し、将来のインフルエンザ対策に組み入れてゆくかについては、さらなる慎重な検討を要するが、全世界のインフルエンザワクチン接種のあり方に影響を与える重要な研究になったことに間違いはない。

日本の地域医療の最前線である長崎の離島に、世界の医療を変える医学研究の最前線があることを、改めて実感させられた研究論文となった。

2017年1月21日



上五島 桐教会(岸川先生撮影)